
白雪姫

レイニーシュライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫

【Nコード】

N1745D

【作者名】

レイニーシュライン

【あらすじ】

麗しき白雪姫は魔女に毒林檎を渡され仮死状態。王子様のキスでようやく目を覚ますのであります。……………などという普通の展開にたどり着くことすらできません。

（前書き）

楽しい童話シリーズその1です。ごめんなさい、嘘です。もはや原作陵辱の域にまで達しているかもしれないくらい、白雪姫から程遠い白雪姫です。また同作者の「スナーク狩り」と違い、文章の8割が無駄で構成されています。ご了承ください。

昔々、多分江戸幕府よりは昔で、ネアンデルタール人の誕生よりは最近の、恐らく北半球の何処かにある国で、少なくとも国民の89・25%は支持してくれている王様がいました。

因みに国名は、「大ナイカホア及び東西南北中央部イナモデント島 連合社会民主主義人民共和連邦合衆首長共産帝国」。現在進行形でもっと長くなるよう変更され続けていますが、ぶっちゃけてただの王国で意味はありません。その上王様は飾り。ジャンケンで決められた学級委員長とあまり変わらないようです。

他にも、「ンネヤデンナ諸島協同独立前線良識鎖国連続分離分割学群並列回転選抜変則確定考查試問改正共通一次公国」などの案も出たのですが、これにしても最初に「ン」がつくと日本のしりとり
の常識を覆してしまうということで、国民の92・36%の反対によって没と相成りました。

さて、このどこにでもありそうな、気候も年に2、30回嵐が来るだけで、後は土地の形状のおかげで一年のいたい3分の1ぐらいが冬だというぐらいで、土地もときどき地盤沈下や直下型大地震が起こり、後は龍が棲んでいるとも言われる凶悪な山々に囲まれているだけで恵まれていて、ギリギリの背水の陣といった所で鬼より怖い荒武者達が外敵の侵入も防いでいる、「おいおい難攻不落の上侵略する気にもなれねえ憐れな土地じゃねえか」と各国の方々にも言われる国に、大層美しいお姫様が生まれました。

さて、赤子ながらに大層美しかったお姫様。

あまりにも美しくて三日三晩考えていた名前もなんだか貧相に思え、王様は目に入れても痛くない赤子を見ながら考えたのです。

「ああ、我が娘よ。何たる美しさだ。両親は金髪だというのにお前

は夜よりも恐ろしく暗い黒髪で、なんとなく自分の子かさえも疑わしくなりそうだ。

ああ、我が娘よ。何たる素晴らしさだ。我々は青い目だというのにお前は血よりも余程赤く濃い瞳で、なんとなくお前の父親が本当に私なのか疑わしくなりそうだ。

ああ、我が娘よ。なんたる恐ろしさだ。お前の親は温もりある肌だというのにお前は降り積もる雪よりもっと冷たく白い肌で、お前の母親が私だけを愛しているというのも疑わしくなりそうだ」

王様は称えているうちに、お后が黒髪の愛人でも連れ込んでいるのではないかと、疑問を持ち始めていました。

それから、ちらちらどころか情緒もへったくれもないように降っては積り降っては積り、城門も凍てつかせるドカ雪を強化ガラスの窓越しに見て、思いついたように自分の手を叩きました。その拍子に赤子を身長2m以上ある王様が落としてしまいました。でも泣くどころか全くの無表情です。寧ろそれでお終いかとも言うような目つきです。

王様は赤子を抱き上げて、何度か撫でてあげました。赤子が鼻で笑ったような仕草をしたので、王様の細くヒビの入った堪忍袋の緒は、あつと言う間にずっぱりめつきり切り裂かれ打ち砕かれ焼き尽くされました。

キレてしまった王様は熊のような巨体を生かし、小さな赤子を振りかぶり、ミサイルが打ち込まれてもへっちゃらの、超硬化ナントカニューム合金製のごつごつした壁に叩きつけました。

ごろごろと転がる赤子に王様は我を取り戻し、慌てて抱き上げました。赤子は無傷でした。どころかニヤリと美しく、けれど不気味に笑い、紅葉程度しかない小さな手を突き出し、ちょいちょい、と人差し指で挑発します。王様は「いいストリートファイターになりそうだな」と将来を安心しました。

そして王様はゆっくりと赤子に話しかけました。

「お前は白雪だ。夜になればそこに落ち、血を浴びればそれを取り込む、そんな魔性の輝きを持つ我が娘よ」

誉めているのか畏れているのか、王様はそう名づけました。

赤子は気に入らないようではないのでしようが、王様の弱気を感じ取ったのか顔に唾を吐きかけ、嘲るように肩をすくめました。

王様は可愛い我が子の悪戯だと、笑顔で窓を開けて猛吹雪の中に放り捨てました。地上百階建ての、その時代ではバベルの塔より高い、超高層ビルの最上階から落としたのですからたまりません。

下でぐしゃりと何かが潰れる音と悲鳴が聞こえました。

ここからではよく見えないので、部屋の端末でカメラを操作して様子を見てみました。（カメラがあったのかどうかは時代考証せずともわかりますが）どうやら下で見張りをしていた憐れな兵隊が、高速で落下する赤子に潰されてとてつもなく降り積もった雪に突っ込んだようです。

王様は軍部に連絡して身元を確認しました。

「ああ、彼か」

見覚えのある名前でした。

当然です。

何故かは分かりませんが王様が痼癬を起こして窓の外に物を投げると、複雑骨折や出血多量ではすまない大怪我を必ず被る、王城守護兵団第196小隊所属のやられ役、ジム・ボール軍曹さん（98歳）のようです。

カメラをもう一度見ると、じんわりどころか泉のようにこんこんと赤い液体が雪を溶かしており、周りの兵隊が「またかーっ！」とか叫びながら担架を運んで走ったりしています。

とそこで、ずるり、と小さな影が這い出ました。

白雪です。

ご自慢の肌は赤い液体が飛び散っていて、特に顔のが怖いです。二足歩行でしっかりと歩いて、カメラに向かい左手を向けました。

それから、中指をぴ、とあげて、嘲笑。

兵隊達もこのバケモノもとい奇ッ怪極まりない赤子に驚いたものの、さっさとジム・ボール軍曹さん（98歳）を担架に乗せて走り去っていきました。白雪は一人でロッククライミングを真似てつるの壁をするすると上っていきました。

こんな風に、お城は何時も平和でした。

ですが、ある日お后様が病に臥せてしまいました。

それは唐突で、誰も予想できませんでした。

前日まで、何時ものように白雪と遊んだり白雪と遊んだり白雪で遊んだり白雪と遊んだり王様とストリートファイトしたり血で血を洗ったり暇潰しに隣国にミサイルを飛ばしたがつたりと龍の首を取ってきたりと穏やかに健やかにしておられたのに。

毒を喰らわば皿どころかテーブルと周囲の人間まで喰らい尽くしそうなお后様です、毒なんて線も考えられません。そんな毒があれば恐らく世界中の人間を一瞬で原始分解できるでしょうから。

本当に病気なのかも疑わしいです。お后様の体内に侵入したウイルスはことごとく翼の生えた量産型も真っ青の白血球により喰らわれ、お后様の血となり肉となります。細菌にしてもロンギヌスの槍でコアをぶち抜かれるよりも簡単に食い尽くされます。

ですが、本当に臥せっておしまいになられたのです。

今も寝室の馬鹿みたいにでかいベッドの上で、

「おのれええええええええええっ！ 末代先まで崇うてくれるわあ！」
だとか、

「痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！いや、いや、いやあー！！」
だとか、

「イヤ：死ぬのはイヤ：死ぬのはイヤ：死ぬのはイヤ、死ぬのはイヤ、死ぬのはイヤ、死ぬのはイヤ、死ぬのはイヤ………死ぬのは、いやあああっ！！」
だとか、

「グキヤアアアアアアシャハアヒギヤゲボブギイシアハアアアガジャラギイ（以下人間の発声限界を超えましたので略）」だとか、苦しげに声を上げています。

お医者様も原因が分からず市中引き回しの上火炙り獄門となつてしましました。

といっても、まともな神経のあるヒトは入れないでしょう。恐らくお后様のお姿を見ただけで体が動かなくなり、本能が赤色の第一級警告を出し、パターン青が検出され、後ろに向かつて前進だと命じるでしょう。多分そのすぐ後に花畑で優しくったおじいちゃんとかに会えるでしょうが。

そしてお后様は暫くしてお亡くなりになってしまいました。お亡くなりになってしまったと思われます。お亡くなりになったものだと書類上記載され、お亡くなりになったのだという発表があつてお亡くなりになられたものだという噂が既成事実的に広まりました。

何せ、お后様の遺体は運び出されず、寢室は開かずの間として1万2千枚の特殊装甲と4万8千通りの殺戮用トラップで覆われ、七千七百七十七万七千七百七十七の東西南北問わずの術式結界で封ぜられ、四方に青龍朱雀白虎玄武の四神の守護をおき、部屋を囲むようにセフィロトの樹が床に描かれ、扉と壁一面に10000人の血で染めた封印の符を三重に貼り付け、常に最高峰の魔術師が最低二小隊でもって周囲で究極的な呪文を唱え続けているから中の様子は分からないのです。

ただ、人の口に蓋は出来ぬもの、噂程度のことならわかります。本当はお后様は生きていて、あの部屋の中で月でつくられたチタニ合金で出来た666通りの拘束具で戒められ、禁忌とされる空間

歪曲魔法で異界に縛り付けられているということですが、噂なので本当かどうかは分かりません。時折強固な壁が強大な質量で内部から攻撃されることはありますが。

お后様がお亡くなりになられたとの公式な発表があつて、お后様がお亡くなりになられたことが半ば公に認められつつあるのを感じ、王様はさめざめと泣くなんてことはまるでなく、元気に新しいカミさんをさがしました。

そしてついに王様の目にありませんでしたが、大層お美しい黒霧という方でした。実はこの黒霧こそが、お后様を殺害ないし活動不能状態に陥れた張本人でした。目的は国をのっとること？ いえいえ。個人的な復讐？ とんでもない。ただの暇つぶしでした。

黒霧が新しいお后様となった日には開かずの間はそれこそ混沌とした邪悪に支配されたようですが、本当に元・お后様がくたばっているかどうか王様でなくても疑うでしょう。しかし黒霧の暇つぶしによってくたばっていてもくたばっていなくても関係ない状態になっているのですから、今後本編にかかわることはないでしょう。

さて、黒霧がまだ幼い白雪をいじめたとかそういうことは特になく、義母とすら思えないような実に淡々とした関係が続きました。その熱くもなく冷たくもない、ひたすらに乾燥した関係はむしろ清々しいくらいでした。

ですから白雪は陰気にすくすくと不気味に成長し、十五歳の誕生日を向かえ、同時に国家魔術師認定、特級魔討師認定、Sランク召喚師認定、及び「絶無」の称号を得ることが出来たのでした。これでもう個人で大隊クラスの軍隊とも渡り合えるでしょう。

そんなある日、黒霧は大きな姿見を前に、冷え冷えとした視線を虚空に向けていました。

「鏡よ鏡、この世で最も美しいのは誰だ？」

そんなにあわない質問をすると、鏡も事務口調で答えました。

「白雪姫様でございます」

ふうん、と黒霧は気のない生返事を返しました。

なるほど、白雪ほどの美しさであれば、多少の作り笑いと決して喋らないこと動かないことを条件にすれば納得できるというものです。もつとも、それはあくまでも観賞する目的での話であって、人間の隣に立たせてよいものかどうかはなはだ疑問です。

黒霧はまるで興味がなさそうでした。ですが、

「ふうむ、それでは私が誰よりも美しくあるために、白雪は殺さなければね。」

なに、それがお約束というもののなのさ」

棒読みで3カメに向けてそんなことをのたまい、黒霧はすぐに白雪を呼び寄せました。そして数分と経たないうちに訪れた白雪に、出会い頭にとりあえず素手で心臓を抉り出してやりました。

さすが元・お后様をお亡くなりになられたと公的に報道させた女です。兵隊にやらせて失敗するなんて間の抜けたことはしでかさなようです。念のために短い詠唱をして手の上の心臓を焼き尽くすことまでしました。

しかし白雪もどうも普通ではありませんでした。

心臓が二つありました。

んな阿呆な、と黒霧が思ったかどうかは知りませんが、少なくとも黒霧は白雪の殺害に失敗してしまったようです。げげはがはと気管に入った、というよりさかのぼった血を吐き出して白雪が笑います。笑います。笑います。わらいますわらいます。わらいます。わらいます。わらいます。ワライマス。ワライマス。ワライマス。ワライマス。ワライマス。

「あ」

自主（ざんっ）規制♪

こうして、白雪はいつまでもいつまでも、激しい喜びはないが代わりに絶望もない、植物のように穏やかな日常を暮らすことが出来たのでした。

どっとはらい

(後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございますので、
そちらも是非ご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1745d/>

白雪姫

2010年10月8日15時58分発行